

【講評文】 8月11日（木） 14校目

## 「レインボー」 鶯谷高校

差別や偏見にまみれた世界で社会の固定観念に従って生きるのか、自分らしく在るべきなのかということをも題材にした劇でした。キャストの動き、照明、音響の変化から現在から遡ること20年の昔の固定観念に縛られた社会が表現されており、衣装は現代の社会について表現されていて、話に入り込みやすい劇でした。

キャストでは、一人一人のキャラが色分けによって確立されており、その人がどんな性格で、どういう立場なのか分かりやすく、話を理解しながら観ることができました。しかし、一人一人のなぜそういうキャラなのかについて、背景の言及がなく、少し分かりにくいところがありました。例えば、いじめっ子について、降旗が自殺してしまっても変わらず不貞腐れており、なぜそこまでするのか、その2人に何があったのか、といった人物背景がないと、ただの悪い人のような感じになってしまいます。ラストシーンの和解に至る経緯のつながりに難があり、感情移入しにくい所が若干あったという意見が出ました。

照明では、細かな変化により今はどこにいるのか、学校内なのか、屋上なのかははっきりしていました。これにより、場面の移り変わりがわかりやすくなっていました。また屋上のシーンでは、空の色を青色だけにするのではなく、上の方に紫色をもってくることで、夕方であることが表現されていて、細かいところまで研究されていると感じました。

音響では、音の消し方等が工夫されており、話の移り変わりがわかりやすく、場面の移り変わりをスムーズに理解することができました。

トランスジェンダーやレインボーフラッグについてよく知らない観客であっても、図書館で説明する場面があることにより、見ている側も学んで理解することができるようになっていました。キャスト間の声量については、もう少し距離を考えた声量にするとよかったのではないかと感じます。場転に関しては、ランニングをして場転をすることにより、話の繋がりをみせ、観客の集中を切らすことがありませんでした。

主題がトランスジェンダーや、LGBTsに置かれた内容で、自死のシーンまでをも描いた重い話でしたが、役者の細かい仕草や、照明の変化がとてもリアルで惹き込まれました。ラストシーンでの再集合は大団円に向けてというよりも、この20年の間に日本、あるいは世界で起きた変化が表現されていたようで、胸のすく思いがしました。

鶯谷高校のみなさん、上演お疲れさまでした。

(文責 岐山高校 1年 棚橋奏心 藤根蒼)